

指導員から実践へ、そして、今、 家族型肉用牛経営のインフルエンサーへ

平川 修・美穂（肉用牛繁殖経営・大分県日田市）

地域の概要

日田市は、大分県北西部、福岡県と熊本県に隣接した北部九州のほぼ中央に位置し、周囲を阿蘇・くじゅう山系や英彦山系の山々に囲まれている。内陸特有の気候から寒暖差が大きく、夏は35℃以上の真夏日を記録することも多く、冬は山間部だけでなく市中心部でも雪が積もることもある。

日田市の耕地面積は3,310haで、そのうち田耕地面積は1,760ha、畑耕地面積（果樹園含む）は1,550haとなっており、平坦地から準高冷地まで、多様な地形と気候を活かした農業が行われている。令和元年の農業産出額



（写真1）左から経営主の平川修さん、美穂さん

は123.7億円で、そのうち畜産は65.4億円で約53%を占める。畜種別では、肉用牛6.2億円、乳用牛47.2億円、豚10.1億円、鶏1.7億円、その他0.2億円で、乳用牛は県産出額の54%を占める県内屈指の酪農地帯である。

（表1）経営・活動の推移

年次	作物構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
	肉用牛繁殖	成雌牛5頭		父が褐毛和種成雌牛5頭を導入し、農耕用として飼養を開始
昭和47年	肉用牛繁殖 養豚	成雌牛5頭 繁殖母豚20頭		繁殖母豚20頭を導入し、肉用牛との複合経営を開始
昭和61年	肉用牛繁殖 養豚	成雌牛5頭 繁殖母豚10頭		大学を卒業後、22歳で日田市農業協同組合に就職、営農指導員（畜産担当）を務める
平成2年	肉用牛繁殖	成雌牛20頭	70 a	養豚経営を中止
平成11年	肉用牛繁殖	成雌牛20頭	70 a	補助事業を活用し、成雌牛60頭規模の畜舎を建設
平成12年	肉用牛繁殖	成雌牛60頭	70 a	農業協同組合を退職後、経営を継承、繁殖雌牛を60頭まで増頭、家畜人工授精師の免許を取得
平成25年	肉用牛繁殖	成雌牛50頭	70 a	大分畜産Net“鼓動”会長を2期4年間務め、若手生産者の経営確立や人材育成に注力する
平成29年12月	肉用牛繁殖	成雌牛50頭	70 a	日田地域畜産ヘルパー組合を設立し、初代組合長を務め地域の肉用牛定休型ヘルパーを支援する
平成30年1月	肉用牛繁殖	成雌牛50頭	70 a	大分畜産Net“鼓動”の鼓動塾長として、県内各地域の中心となる担い手育成に取り組む
平成30年	肉用牛繁殖	成雌牛50頭	70 a	指導農業士（肉用牛繁殖 水稻）として県知事から認定を受ける

(表2) 経営実績 (令和2年)

経営の概要	労働力員数	家族・構成員	1.4人	
	(畜産・2000hr換算)	雇用・従業員	0.0人	
	成雌牛平均飼養頭数		53.5頭	
	飼料生産 実面積		70 a	
	年間子牛分娩頭数		47頭	
収益性	年間子牛 雌子牛 (肥育素牛生体販売)		23頭	
	販売頭数 雄子牛 (肥育素牛生体販売)		20頭	
	成雌1頭当たりの子牛販売収入		575,927円	
	所得率		31.1%	
生産性	成雌1頭当たりの年間子牛分娩頭数		0.88頭	
	成雌牛1頭当たりの年間子牛販売頭数		0.80頭	
	平均分娩間隔 (令和2年: 47頭分)		12.8ヶ月	
	雌子牛	販売日齢		283日
		販売体重		281kg
		日齢体重		0.993kg
		1頭当たり販売価格		676,835円
	雄子牛	販売日齢		274日
		販売体重		304kg
		日齢体重		1.109kg
		1頭当たり販売価格		762,245円
	粗飼料	成雌1頭当たりの飼料生産延べ面積		3.7 a
		借入地依存度		0%
飼料TDN自給率			12.2%	



(写真2) 繁殖管理システムの活用

経営管理・生産技術の特色

【昼間分娩の導入・省力化】

限られた労働力で、繁殖成績を向上させる方法の1つとして、成雌牛への夕方1回飼料給与による昼間分娩誘起に取り組んでいる。その結果、就業時間の朝6時から夕方18時までに分娩兆候を確認でき、安全に分娩経過を観察することが可能となり、直近3年間の分娩事故は無い。また、繁殖管理システムで分

娩予定日を確認し、分娩間近の成雌牛をしっかりと観察することで個体ごとの繁殖管理情報を「見える化」し、繁殖成績を向上させている。

また、成雌牛への夕方1回の飼料給与は労働時間の軽減になり、何より深夜の分娩監視が大幅に軽減され、心理的なストレスが軽減された点は、大きなメリットである。

【子牛の発育改善】

子牛は、分娩後約1週間は自然哺乳とし確

(表3) 昼間分娩率と年間労働時間の推移

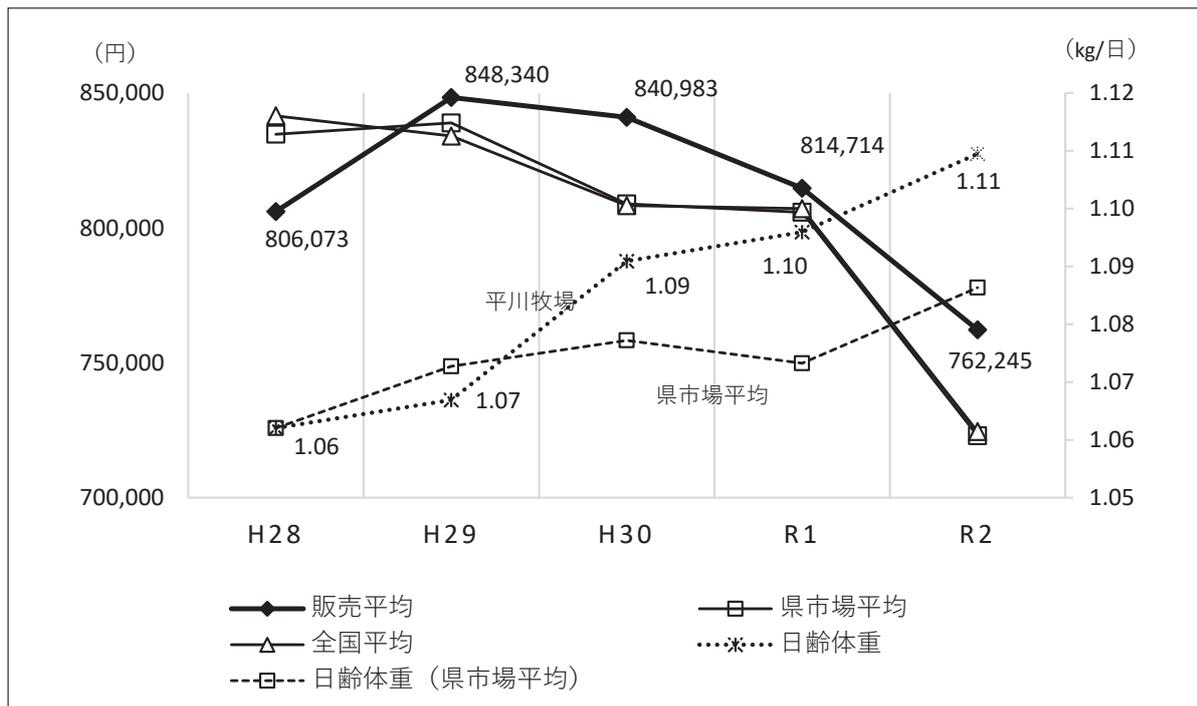
	H30	R1	R2
平均成雌牛頭数 (頭)	52.4	52.7	53.5
分娩頭数 (頭)	42	43	47
うち昼間分娩	21*	37	39
昼間分娩率 (%)	80.8%	86.0%	83.0%
成雌牛1頭当たりの年間労働時間 (hr)	60	60	56
同上 (全国平均)	82	75	-

*H30は、4月以降の分娩牛計26頭の集計値 (21/26 = 80.8%)。

注1) 昼間分娩は、6時~18時の間に分娩兆候を確認したもの

注2) 全国平均は、中央畜産会が発行した畜産クラスターに係る全国実態調査による集計値

(図1) 日齢体重と子牛販売価格(去勢)の推移



実に初乳摂取させた後に、カーフハッチへ移動させ人工哺乳を行う。スターターを3日連続1.5kg以上摂取できる約60日齢を離乳の目安とし、早期から第一胃作りを重視している。平成28年からはモネンシン配合のスターターの給与を開始し、軟便及びコクシジウム症の抑制や飼料効率の向上により発育が改善され、治療にかかる精神的ストレスも減少した。モネンシン配合飼料の給与期間は、育成用配合飼料への切り替え時期も含め、生後約4カ月齢としている。順調に発育した子牛は、購



(写真3) 経営主が考案したカーフハッチ

買先である県内外の肥育農家にも高い評価を受けている。

【飼料給与水準の見直しによる堆肥量調整と飼料費の低減】

自給飼料作付面積は水稻ワラを含め130aで、自家消費できる堆肥量も限られるため、成雌牛には繁殖成績が低下しない程度に飼料の乾物給与量を制限し、排出される糞尿量を最小限に調整している。このことで牛舎からの糞搬出量が少なくなり、糞搬出作業は数カ月に一回程度である。成雌牛に給与している飼料は、TMR混合飼料をベースにしているが不足する繊維分は稲わらや乾牧草で補っている。直近3年間の平均分娩間隔は12.8カ月と良好であり、牛群の生産性を低下させることなく飼料費の低減を実現し、かつ省力的な飼養管理を行っている。

【シンプルな牛舎構造】

平成11年に畜舎を新設する際に、視察した鹿児島県の繁殖農家の事例をもとに、直下型換気扇とスタンションを設置したフリーバー



(写真4) 快適に過ごしている成雌牛



(写真5) 通気性抜群の開放的な構造

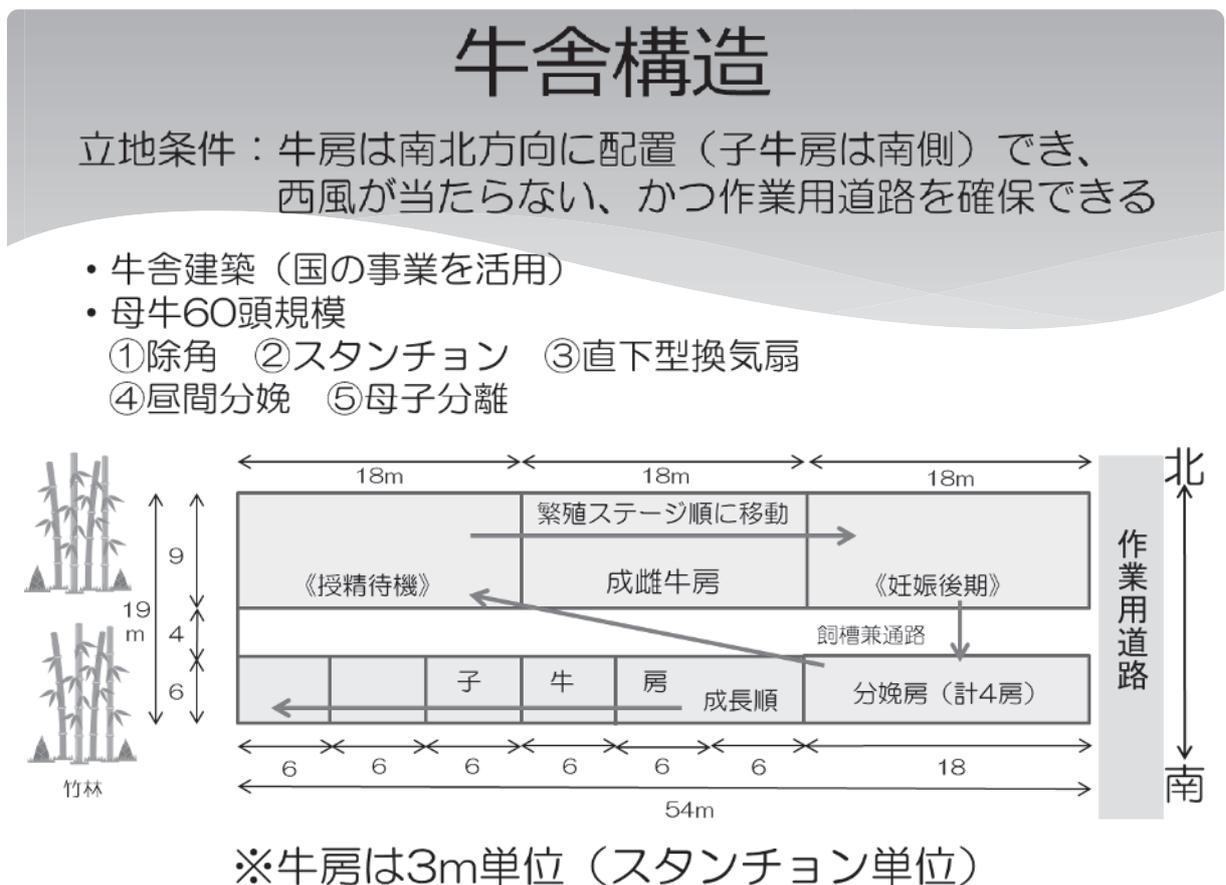
ン畜舎で成雌牛を除角して飼育する方法に取り組むこととした。当時、県内の肉用牛繁殖経営では先駆的な牛舎構造であり、牛床の乾燥と通気性を向上させ、暑熱対策にも有効であった。また、壁面を無くし、見通しがよい開放的な構造にすることで発情発見をはじめとした牛群の観察が容易であった。この様な

飼育方法では、ストレスの少ない環境での繁殖ステージ毎の飼養管理と、効率的な作業動線を確認でき、このことが省力化へ繋がっている。

【月次決算と経営シミュレーション】

大分県や県畜産協会等の助言を受けながら、自ら月次の収支状況を把握し、先を見据

(図2) 牛舎の構造と平面図



えた経営計画を作成し、自らの経営を振り返ることにしている。経営の厳しい時期には必要に応じて金利の低い制度資金の活用や、農協預託牛制度を活用するなど資金繰りを常に考え実施してきた。自らの経営を管理できるのも、経営主が営農指導員当時に、農家の資金調達支援、経営計画、負債農家の改善計画に積極的に取り組んできた経験が生かされている。

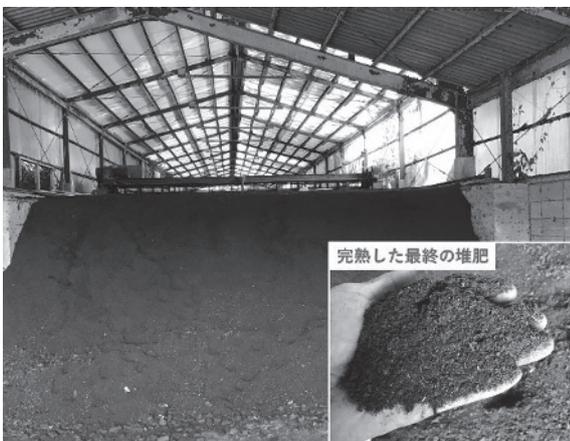
地域に対する貢献

【耕畜連携の活動】

堆肥処理施設で調整された堆肥は、飼料畑（約6割）と近隣の水稲農家（約2割）への堆肥還元や、果樹をはじめとした周辺の園芸農家（約2割）へ販売することで、全量適正に処理されている。顔が見える地域内の取引が主であり、輸送コスト等の経費は無く、耕種園芸農家ともお互いの立場を理解し認め合える点でもメリットは大きい。

【食育授業と職場体験学習】

自身の子供が在学していた時期からPTA会長を務め幅広い活動に参加していたこともあり、地域の学校教育にも積極的に取り組んできた。地元の小学生を対象に、「食と命」をテーマに食育出前授業を9年間続けて実施



(写真6) 地域に販売されている堆肥

している。また、農場見学や地元中学校の職場体験学習も受け入れ、生産者の思いや命をいただく食について考える機会を様々な形で提供している。今後も地域の畜産への理解醸成を深め、食や命の大切さを次世代へ伝えていきたい。

【肉用牛ヘルパー組合の設立と担い手育成】

地域の肉用牛繁殖経営の高齢化が進むなか、ゆとりと雇用を生み出し、地域全体の経営の継続性を確保するために、平成29年12月に日田地域畜産ヘルパー組合を設立した。生産者が飼養管理作業をヘルパー要員に任せて、月に3日程度の休日を取得できる定休型ヘルパーの形態である。現在、親元就農を考えている次世代の若手生産者をヘルパー要員として雇用し、地域で次世代の担い手を育てる環境を整備している。

【生産者ネットワークの拡充】

県内全域の肉用牛・酪農生産者43名で構成される生産者組織である「大分畜産Net“鼓動”」で会長を2期4年間務めた。当組織は、ベテランから新規就農の若手まで畜種を越えて構成されており、幅広い情報共有と技術研鑽を通じてお互いの資質を高め、各々が地域のリーダーとなり、将来を見据えた儲かる畜産経営と魅力ある本県畜産の実現を目的に平



(写真7) 平川修さんによる食育出前授業

成19年に設立されている。

研修会の開催や県農業祭及びメディアにおける「おおいた和牛」等の銘柄確立と県産和牛肉の消費拡大に向けたPR活動など、県内全域の畜産ネットワーク作りにも重要な役割を担っている。なかでも、生産者が講師となる勉強会“鼓動塾”の塾長として、地域、世代を越えて次世代を担う若手生産者の育成に積極的に取り組んでいる。

女性の活躍・働きやすい職場環境づくりの取組み

【女性の活躍と家族との調和】

「夫婦仲良く」を信条に、適材適所で役割分担し、効率的な労働環境を整備している。妻の美穂さんは、午前中は家事に専念し、夕方の成雌牛への飼料給与作業を主に担当し、定期的な記帳や決算などの経営収支も管理している。ヘルパーを利用する日以外は、ほぼ毎日夕方は牛舎で経営主とコミュニケーションも図り、発情監視や分娩の介助も補助している。

令和元年度の県畜産共進会では、第5区女性・後継者の部に出品し、最優秀賞2席を獲得するなど活躍の場を広げ、今まで以上に牛飼いのやりがいと可能性を感じている。その他子供の部活動の応援や友人との食事な



(写真8) 鼓動塾でのバーンミーティング

どの時間も大切し、何より家族のことを最優先に考え子育てに悔いを残さぬよう、今後も家族と経営の両立を目指していく。

将来の方向性

【次世代の人づくり】

平成30年に県指導農業士の認定を受けたことを機に、ヘルパー組合をはじめ地域で指導的役割を果たしながら、県内生産者組織の活動でも自己研鑽の場を積極的に企画・提供し、自身の経験を次世代に伝えていきたいと考えている。畜種や地域を越えて若手からベテランまで幅広い世代の生産者が互いの情報を共有し、刺激し合い、自身も成長しながら、技術向上と儲かる経営の確立に向けた支援をすることで次世代のリーダーを育成し、県全体の底上げを図り県内の肉用牛振興にさらに貢献したいとも考えている。

【肉用牛モデル経営のインフルエンサーとして】

省力化の視点から肉用牛経営を捉え、次世代の円滑な参入・継承のための「新規参入モデル型経営体」として、そして地域のインフルエンサーとして、これからも農場成績の向上に軸を置いた実践を重ねていきたい。



(写真9) 県共進会出品牛「さちなか4号」と美穂さん